

認知症を生涯の課題に（一九七〇年～）

一九七〇年代から我が国でも、認知症の患者さんが徐々に増えてきて、認知症を抱えたご家族が、どうしたらよいのか分からなくて、大変に苦しんでいらっしゃるのを、見聞するようになりましたので、脳卒中の次は、認知症を私の生涯の課題にしようと決意しました。

しかし、当時の医学では、「認知症は、どんどん進行して悪くなってゆくもので善くなることはないと言うのが、認知症診断の一項目となっており、若し、病状が改善したら、それは認知症ではないんだ。」とされていました。

だから、世界中の医者が、「認知症には治療法はないから、診断するまでが医者の仕事で、後は、自宅かナーシングホームにまかせればよい。」と考えてました。

それなのに、認知症の患者さんやそれを抱えたご家族の苦しみを見るに忍びず、なんとかして認知症を少しでもよくする方法を見つけたいと決意したわけですから、まさに、ドンキホーテのようなものでした。

ですから、こうすれば認知症はよくなると発表した時には、医者仲間のみんなから罵倒され、認知症の定義も知らないインチキ医者だと口汚くののしられました。